エスプラネード

大西亥一郎

アクトス臨時増刊号

エスプラネード

ジッパーを開けた。
電車の中も暑かったが、西藤江の駅に降りてみると、更に温度が上がっているようであった。陽春には冬の衣装を持てあますことになる。
「高架か」
呟いて、改札機に読ませたイコカカードを財布になおすと出口の階段に向かう。十五年前の退職の時は、駅は地上にあったのだ。都市の変化は早い、半年も行かないと、しもた屋が取り壊されて小さなビルが出来ていたりする。
藤江市の中心近くにあり生活に便利な自宅からは反対方向に西藤江はある。だからたった四キロ程なのに、退職以来十五年も来ることがなかったのだ。尤も心のどこかに来ることを拒否する気持ちが屈んでいたのかも知れない。

空は薄ぼんやりと晴れていたが、駅前は空気が灰色に弛んでいた。
駅が高架になったので、北から幅が五メートルもある歩道を両側に持つ二車線の道が、南まで一本に通っていると思っていた。が、南は相変わらず、車が一台通るのにやっとという狭い道が目の前に続いていた。南のかかりにあった銀行は北に移転して、空きビルのままである。大手のスーパーの入口には、台所雑貨が並べられていて、入口のガラス戸の奥はなんとなく薄暗い。両側に並ぶ商店には、品物が並ぶが、どうも輝きがない。駅南の町全体が、くすんでいるのだ。行き交う人に生気がない。
誰も私を見ない。他人など素知らぬ顔で疲れたように、それでもせわしげに足を動かしている。
「北に比べて人口も減っているらしいわ」と言っていた妻の声が蘇った。つい最近亡くなったが、気のいい女だった。この駅南にある市の公民館に月に一度通っていた。ヨガ教室だそうで、私も自宅で教えて貰ったものだ。妻は、天気

のいい日は、そこから少し南に下りて東へ向かう狭い市道を通って帰ってくることがあった。四、五キロほどだからいい運動になる。最近出来たとか言うドラッグストアーなんかがあって結構いいものが安いらしい。リュックを背負って出かけることもあった。

パチンコ屋と飲み屋と、饅頭屋、その向かいの郵便局を抜けると公民館があった。そこから南は四階建ての低層の公営団地、マッチ箱のような建て売り、大小の町工場が混在していた。

私は昭和三十八年、一九六三年、大阪の大学を出た後、二十五歳でその町工場の一つに就職し三十五年勤めた。当時は、公営団地はなく建て売りも少なかった。殆どが文化住宅と言われる木造モルタルの二階建ての長屋であった。その一部屋に、二十八歳から三つ歳下の妻と僅かな期間住んだ。同じ徳島出身の彼女は、私の勤める金属加工会社の経理に勤めていた。総務課に配属された私に武田という上司が仲人をしてくれたのだった。二百人程の従業員を持つ勤め

先は、その後の高度成長期にもたいして規模は大きくならなかった。ただ、狭い市道を挟んで東西に延びる大手の関西鉄工会社の一次下請けで安定していたし、給料は低いなりに上がった。だから風呂なしの文化住宅には三年ほどいただけで、その後、現在の居住地に建て売りを三十年ローンで買った。

「文化住宅っていい名前ねえ」

少し驚いたが、頭の中に妻の声が響いた気がした。

私は黙って歩み続けた。

三月のお水取りが終わると春だが、首回りが暖かい。ジッパーを開けたが厚手のカッターの首回りが空気で締め付けられる気がする。

私は軽く首を左右に振って、丹田に力を込めた。背筋を伸ばして顔を正面に向けて、ゆっくりと足を出す。

ここから東に四、五キロまでが人生の主要な空間だった。妻と出会い、自宅を購入し、息子と娘を育てた。子どもたちは独立し、愛知と東京にいる。大阪

にそれぞれの親戚がいるが、親の葬式以来顔は合わしていない。妻が亡くなり、私は一人住まいである。

「はて、妻の時はどうだったかな」と考えたが思い出さない。何もかも記憶が混沌としている。

「まあ、どうでもいいか」

私は自分の頼りなさがおかしくて苦笑した。

とにかく今日は、昔がふと懐かしくなり腰を上げて出かけてきた。亡くなった妻が私の心の隅に潜んでいて、彼女も懐かしさのあまり現れたのであろう。

文化住宅には、それまでの共同ではなくて、確かに台所と、トイレがあった。もともと大正時代に和洋折衷の住宅を言ったらしいが、第二次大戦後は、この木造アパートを関西でそう呼ぶようになったという。

「この辺りだったな」

私は妻に言うように小さな声を出した。

「その自転車屋さんの裏手くらいね」
私の肩くらいの位置に、亡くなる前の妻の横顔が見えた。
ドキリと心臓が音を立てて、頭の芯が痛くなった。
陽は中天にあり、僅かな白い雲が見えた。微かに風が吹いて、灰色の空気を押しのけて現れたホリゾンブルーの空を揺らした。
私は納得した。妻が現れていた。そんな不思議なことが、人生で初めて経験する妖しさが、なんの疑問もなくストンと胸に落ちていた。七十五にもなると何かの拍子に異人たちとの世界の扉が開くのかも知れなかったし、もうすぐ妻に会いに行ける先触れかも知れなかった。怖さも恐れもなかった。隣に確かに妻がいる暖かい空間の感触を体全体で受け止めていた。それは須臾かも知れない。だがそれを楽しんでいる気分だった。
冬から春には、ときに刹那、異界の門も番人がうつらとして開くのだ。その極めて小さな時間を大切にしたいと考えていた。

自転車屋はもう二十年も前に閉じられていたはずだった。古いガラス戸が灰色に汚れて、小島自転車店の文字が剥げかかっていたのを覚えている。だが、ペンキの匂いがしそうな入口から覗くと、見たことのある中年の店主がペダルを取り替えていた。

「あ・・・」と私は言葉を飲んだ。亡くなった妻と歩いていたら、半世紀も時間が跳んだ。

私は軽く目眩を覚えた。時間の波が空間を押し包んで引き戻している感じがした。

「沢山建っていたな」

やっとそう言った。

「ええ、若い人で一杯だったもの」

妻の声だけが若々しくて、私は慌てて喉に力を入れた。

「風呂屋も一杯だった」

「そうね。よく待ち合わせて喫茶店に入ったわ」
そうだった。風呂から出て、小さな喫茶店でお茶を飲み、それから文化住宅に戻った。モルタルの壁は薄く、窓の木枠の隙間から風が吹き込んではいたが、妻と二人で布団にくるまっていれば、それだけで暖かかった。
「ほら、早く鍵を開けてね」
私は妻と、夜の「幸荘」の二階廊下に立っていた。
妻は頬が薄赤くて、唇がリンゴ色だった。全体が小作りで可愛らしかった。
急に体が締まっている気がした。自分の肉体が若い頃に戻り、意識だけが七十五歳のままであることに違和感は覚えなかった。
ズボンのポケットに手を入れると鍵が手に触れた。木製のドアは軋んだ音を立てた。
玄関土間はマット一枚程しかない。ドアの中は板張りの台所だった。左手にトイレがあり、三畳程の台所の真ん中に赤い花柄のテーブルクロスがかかった

小さな食卓があった。
傘電球のひもを引いて灯りをつけた。
格子状の磨りガラス戸があり、開けると三畳の行灯部屋であった。その向こうの襖が開け放ってあって六畳の和室から、窓を通して月明かりが差し込んでいた。
鰻の寝床のようなそこが新婚生活の出発だった。
「カーテンを閉めなくっちゃね」
妻が奥に進んだ。月光の中に小柄な体が溶け込み、そして消えた。
私は、小島自転車店の前にいた。崩れ落ちそうなガラス戸がぴったりと閉まっていた。桟についたスチールグレイの砂埃が、風に煽られて僅かにこぼれ落ちていった。
体は軽くなった。枯れ木のような足が、はき慣れた茶色のズボンに包まれていた。

ほんの数秒佇んでいたのかも知れなかった。だが、行き交う人たちはくすんだ目をして先を急いでいるだけである。駅から南は人口の減少が始まり、高齢化率も市内では一番高くて四割近い。小学校は閉校して北の学校に一本化された。

私は大きく息を一つついて、歩き出した。

市道に出た。少し西に行けば、大和金属がある。関西鉄工の下請け。鋳物と、旋盤加工、溶接をして、関西鉄工に納めていた。

だが、私は正面の関西鉄工を見て東に折れた。長い塀沿いに一メートル幅の歩道があり、それを辿れば、四キロ先の自宅に戻れるはずだった。通勤は電車だったが、たまに自転車や徒歩でこの道を通ったことがあった。

歩き出して足が遅くなった。大和金属に顔を出せばと、心の中で誰かが言っていた。三十五年勤めた職場である。退職後十五年は経っていたが、四、五十代には知り合いもいた。だが、退職以来一度も訪れたことはなかった。楽しい

思い出もあるが、中年以降は、ただ疲れた。総務課員は十名ほどもいたが、初めの頃は、私立とは言え大卒は私しかいなかった。叩き上げの社長の鈴木と、その肉親で固めた重役たちの、秘書役と言うと聞こえはいいが、見栄えのする小間使いだった。歳を取ると副課長という肩書きはついたが、管理職ではなかった。課長は社長の親戚という三十代後半の山田という男がしていた。若い者を怒鳴るしか指示の仕方を知らず、パソコンも使えなかった。流石に私に対しては下手に出ていたが、俺たちが雇ってやっているという意識が滲み出ていた。

中小企業の総務課というのはなんでも屋である。職員の採用から、営繕、会社行事の仕切り、社史の編纂、ビジネス上の礼状の作成、接待の用意とお供から、時には営業にも出た。社長直属という立場であったので、賄賂の世話までした。だから鈴木社長には信頼されていたが、そうかと言って引き立てられはしなかった。

鈴木社長が亡くなり、息子が後を継ぎ、課長の山田が仲人をしてくれた部長

の後釜になる。課長はまたどこかから歳のいった男が来た。安達とかいう四十半ばの、なんでも社長の息子が大学時代にバレー部の先輩だったとかで、傲慢でしかも体の屈強な男だった。

仕事は出来ない。文章はろくに書けないし、ビジネス文書は酷いものだった。「御中」と「様」の使い分けも知らなかった。新書程度の本の活字につかえていた。経済や政治のニュースの話題が出ると黙り込んだ。ところがその裏返しか、スポーツ自慢と体自慢をやたらとした。社内親睦バレーでは、これ見よがしに強烈なサーブをして、それを受けた若い営業部員が指を捻挫した。それだけなら単なるキン肉マンだったが、妙な親分風を吹かせた。数が増えて二十人に近づいていた総務課員を敵と味方に分けた。「あいつは俺の言うことを聞く」「あいつは逆らう」という単純な支配と被支配に図式化してしまった。すると世の人間集団の常で、ごますりと反抗者と傍観者が出来る。私などは歳上の扱いにくい反抗者だった。反抗しているつもりはなかったが、安達にとっては仕

事の出来る、そして自分にごまをすらず、若手からは悪く思われていない人間は気にくわなかった。夜は、取り巻きを連れて飲みに行く。休日は部長や社長とゴルフにでかける。系列会社の重役の持ち物とか言うクルーザーで釣りに出かけたというのが自慢だった。私は飲み会は嫌いではなかった。人間関係を作るには良い機会だった。だがそれを仕事や出世のためだけにする気はなかった。

安達は、私の出した稟議書は後回しにした。

社の上層部に私の仕事に対する信頼はあった。しかし稟議が遅れると何かと不都合が生じた。「まだ出来ていないのか」という事になる。妙なことに、課長の安達の責任は問われなかった。若社長の先輩である。上部との交際は抜け目がないし付け届けも十分だった。体や態度は立派な体育会系なのに、その底に潜む根性は女の腐ったような女々しい奴だと私は思っていた。

副課長の私はそれまで、社長の秘書であり雑用係だった。それは、会社の裏金に触れる機会でもあった。私からは請求しなかったが孫請けや系列会社から

のキックバック、付け届けの幾ばくかは管理していた。尤も私が扱うのは年間でも数百万に満たなかった。

交際費で落とせない付け届けや飲み会、上司の私的な用途の交通・宿泊費、勿論、親睦会などの余分の経費もそこから支出していた。

それを取り上げられた。ある意味ホッとした。しかし困惑もした。不正なものに使う必要はなくなったが、実質的な庶務としては、なくてはならないものもある。例えば残業を強いたような場合、お茶代や食料費がいる。無理を頼んだ後に懇親会も持たねばならない。そのための支払いを安達に頼む必要が出てくる。

彼は判っていて、「無理ですねえ、ありません」と言った。平然とした瞳の奥に、どす黒い炎が見えた。

何度も彼に殴りかかる夢を見た。殴りかかっても反対に殴り倒されるのがオチであっただろう。

結局、私は黙って自腹を切った。とても足りなくて、部下に無理を頼めなくなりそれを自分で補った。サービス残業は月に百時間を超えた。

安達は裏金を自分の金のように使い始めた。行事が終わり、打ち上げに行くと、「ごちそうさまでした」と彼に言う社員が増えた。年配者はその出何処を知っていたが、それを知らない若い者は本当に安達が自腹を切っていると思っているようだった。

私は仕事にミスがあるのは嫌な質である。ますます仕事に励んだ。神経質で細かい。正義感が強いと言えば聞こえがいいが、清濁併せ飲めない。そしていくら頑張っても私の仕事ぶりを評価する者は誰もいなくなってきていた。必要性を認められない存在は虚しくて哀れである。

転職を考えたが、安いとは言え四十代後半で三十数万の月給をくれるところはなかった。子どもたちは高校に進み、これから十年はもっとも金のかかる時期である。

ねっとりとした嫌みにも耐えた。工場の工員ならば、身につけた技量が役だったろうが、私には何もなかった。便利な、なんでも屋で、それなりに価値はあるはずだった。手配りはぬかりなかったし、部下の面倒見も良かった。

しかし、中小企業の社長にとって、挨拶文の名文はあればよかったが、なくても困らなかった。会社の懇親会に多少手抜かりがあったとしても、面目が潰れる程の企業ではなかった。町工場が少し大きくなった程度である。

歳につれて高くなった給料の私を、会社は必要としなくなっていた。もともと関西鉄工の下請けである。高度成長期なら拡大に伴う熱気はあったが、低成長に入りつつあり熱は冷めていた。苦労しなくても関西鉄工から食べるだけの仕事は来る。無理しなくても会社は惰性で存続し続けていた。反面、不景気は若い優秀な大卒を採れる時代になっていた。

「懐かしさに誘われて顔を出しても、後悔するな・・・」

私は遅くなった足を速めた。

六十歳まで我慢して定年退職した。退職金は七百万を切っていた。二百名足らずの中小企業にしてはよく出た方かも知れない。

子どもたちはもう家庭持ちだし、自宅のローンは終わっていたが、途中で増改築したのでそのローンを全て支払うと、手元には二百万も残っていなかった。年金は月十六万程で、夫婦で食べるに一杯の額である。

それでも、妻を海外旅行に連れ出した。家庭サービスはしたつもりだったが残業続きである。子ども二人を妻が懸命に育ててくれた。

「面白かったわね」

また妻が現れた。足が止まった。見ると今度は歳相応だった。髪の毛は染めていたが、髪は随分痩せていた。小柄な体は太りもせずそのままだった。

おばあさんと呼ばれる歳になっても可愛らしい女である。

彼女が私をどう見ているかは知らない。一メートル七五の身長は、昭和十二年生まれにしては高い。体重が七十七キロあるが、出ている腹回りを除けば、

がっしりした体躯という印象である。男前の部類に属するが、彼女が晩年よく見ていた韓流スターや、イケメンではない。そうだ、船越とか言う俳優や、高橋英樹に似ているかも知れない。ひと時代前の大顔の男である。

私はフッと笑った。俳優が聞けば気を悪くするだろう。

「顔が大きいと言わずに、顔が広いと言って欲しいな」

そんな冗談をよく言った。

夫としては可もなく不可もない。帰宅後や休日は子どもとよく遊んだり、風呂に入れたりした。二、三日連休がとれると遠出もした。風呂掃除は私の仕事と決めていたし、妻の手がふさがっていれば掃除機を掛けたり、洗濯物を畳んだりした。買い物にもよくつきあった。

会社では宴会・接待係であったので、夜が遅くなることも多かったし、その筋の女性とふらりとしたこともあるが、結局、不倫はしなかった。出来なかったという方が正確かも知れない。

体に似合わない蚤の心臓である。そのくせ仕事では誰に頼らず頑張ろうとする。上にごまをすっていれば、もう少し出世できたかも知れない。それも下手である。

趣味は読書と言うと通俗的だが、実際、小説類は好きであった。パチンコにも出かけたが四十前にやめた。煙草を止めて、あの騒音と悪臭、虚無と欲望が交錯する空間に耐えられなくなったからかも知れない。

市道は車がひっきりなしに通る。狭い二車線をバスさえ走り抜ける。しかし工場の塀沿いに延びる狭い歩道は、殆ど行き交う人はなかった。

「ああ、面白かった、旅行」

妻が、私を見上げてもう一度言った。

初めてのハワイは、団体ではなかった。夕方、ホテルから出て巡回バスで観劇に向かった。終演してトイレに行く妻を待ち、外に出るとバスは出てしまっていた。街は暗い。巡回バスはもう劇場には来ない。

「どうしましょう」
私の顔を見る妻を引っ張って歩き出した。初めての異国で、私も不安が顔に出ていたかも知れないが、うろ覚えで二、三十分でホテルに辿り着いた。巡回バスの時刻がどうなっているのか、ＪＴＢのカウンターを探そうと、ホテルの受付に行った。
「ソーリー。ウェア、イズ、ザ、ジェーティービィー」と必死の英語で言ったら白人男性が「その二階の突き当たりです」と流暢な日本語で答えてくれた。妻と顔を見合わせてニヤリとしたのを覚えている。
スイスの登山列車が、山から降りだした途端に私の下腹部が痛み出した。四千メートルの氷の宮殿で冷えたようであった。後から聞くと、壮大な景色も見ずに急に黙り込んだ私を、妻は変に思ったらしい。だが、私はそれどころではなかった「こんなとこで、途中で降りたら、夫婦でツアー団体を追いかけねばならん。言葉もつうじない。が、がまん」と私はなんとか麓まで耐えた。スイ

スの雄大な山々、なだらかな曲線を描く山麓、空中から落ちる白い滝筋、景色などもう目には入っていなかった。

トルコで温泉にズボンの太ももまではまったり、ローマで腕時計が止まって気づかず、あやうく集合時刻に遅れそうになったり、ルーブルで迷子になりかかったりした。妙な失敗をよく覚えているものだ。ニューヨークのタイムズスクウェアーで、写真を撮って貰った東洋人は中国の人だった。このころから世界中に韓国や中国の人があふれ出して、イタリアの船のガイドの音声から日本語がなくなり、韓国語や中国語になっていた。

「本当に面白かったねえ」

私は思い出に浸りながら深い息をついた。

私は当時六十五歳くらい、妻は六十過ぎのはずであった。二人とも元気で、大手旅行社の安い海外旅行を楽しんだ。狭い飛行機の座席に十数時間も閉じ込められるのは難点だった。

「一度、ビジネスで行きたかったねえ」
私は飛行機の中を思い出した。エコノミー席のカーテンの向こうはビジネス席である。観光バスより狭いエコノミーの座席に比べ、個人で横になれる空間があった。食事、飲み物、サービスが違う。但し航空料金だけで、私達の旅が二度出来た。
「あら、ファーストクラスじゃなかった」
いたずらっぽく言う妻の顔がぼやけて、すっと視界から消えた。
歩道を向こうから歩いてきた婦人が、立ち止まって一人呟いていたかも知れない私に視線も向けず、まるで存在しないように、やはり疲れた表情で通っていった。
歩き出すとすぐ工場の塀が途切れた。この関西鉄工は東西二キロ近い塀に囲まれている。南北は百メートル足らずだから地図を見ると随分と細長い。
塀の切れ目から小道を隔てて二軒程、土間に旋盤を一台置いただけのような

町工場があり、その向こうにガラス戸が見えた。
歩道から少し後退したガラス戸は、カーテンが掛かり内部は見えなかった。カーテンは薄汚れ、ガラス戸ももう随分と拭かれたことがないようだった。
中華飯店の金色の文字が、変色してコルク色になっていた。
大和金属に勤めていた時、度々利用したことがあった。歩いても十分少しで出前もしていたが、孫請け企業に出かけたついでに昼をとったこともよくあった。
この辺りの人口は減っている。おまけに誰も彼もが車を持ち、十分も走れば市の繁華街に出る。北の国道沿いには、ファミレスや飲食店があふれている。コンビニも多い。下町の中華料理屋など利用しないに違いなかった。第一ここには、店の前に自転車置き場はあっても駐車場がなかった。
そのまま進むと視界が開けた。
「あ、スーパーか」

目の前に野菜と果物が積み上げられていた。見上げると正面の壁に「のんきや」という文字がゆらゆらと漂い出るのが見えた。

存在しなかったものが、空間に滲み出てくる。

辺りの空気が華やかになり、ざわめきも聞こえた。

私は苦笑した。それもまた今ではなくなったはずの建物であった。どうやら、また意識の世界か、次元の揺らぎかに彷徨い込んだようである。私はもうその不可思議な感覚を楽しんでいた。

大きな倉庫のような鉄骨スレート造りの建物である。屋根と壁だけがあるようで、下はコンクリートが雑に流してあった。入口は高さ三メートル以上もの空間が口を開けて、並べられた台の上に商品が乱雑に積み上げられている。手書きの価格札がそこここにたっていた。

見ると私の服装がジーパンにカッターになっていた。意識は七十五歳であったが、肉体は随分と腹回りの締まった四十八歳のものであった。若い肉体に私

の精神が乗り移ったという感じだ。
　このままだと、私は不老の世界にいることになるらしい。そこそこ若い肉体に、老獪な精神、いや老練な精神が宿ることになる。知識も経験も重ねた老人の頭脳が中年男性の肉体に宿ることになる。それが現実の世なら、大半のものが望むであろう。
　尤も、一九八〇年頃である。まだ携帯も、スマートフォンも、勿論パソコンやネットもないし、コンビニや宅配便がようやく広がり始めた時代である。カラオケもなく、レンタルビデオ店はビデオテープで始まったところであった。ユニクロや吉野家といった店もできはじめた頃に違いない。そんな世界に戻りたいとは考えないかも知れない。
　その年、私は大きな手術をした。
「あのときねえ、私がお願いしたの」
　妻が店先のリンゴを取りながら言った。四十五歳の妻がいたずらっぽく私を

横目で見た。

あの時というのはこの時代の半年程前の検査の後の話だろう。

胃ガンである。全く幸運に胃潰瘍の検査から見つかった胃ガンは、リンパや毛細血管の走る粘膜の下に達していた。検査の後、二週間して医師が自宅に連絡した。

「ご主人に告知しますか」

「黙っていて下さい」

妻は即座に答えたらしい。私の状況では死亡率は二十五パーセント程度だった。

だから私は、胃潰瘍が悪化しているという説明で入院した。医師はえらく手術を急いだ。入院の診察と説明の時に、既に手術の日程が決まっていた。それに両親や妻が個室を勧める。有り難く思ったが、生活に余裕があるわけではない。「胃潰瘍の手術だ、大部屋でいいよ」と、言ったものの、回りの不安は伝

染する。黒い霧が心を侵食し、なんとなく「これは胃潰瘍ではなくて・・・・」と思い出した。

大和金属の課長と同僚が見舞いに来た。安達も流石に「まあ、胃潰瘍だから」と妙に固い声で言った。両親の顔は、「仕事が忙しかったから、しばらくゆっくりしろよと言う天の声だ」という父の言葉とは裏腹に引きつっていたし、高一と中一の二人の子どもたちは、口を真一文字に結んで何も言わなかった。

ガンだとはっきりと私が知ったのは手術三日前である。若い執刀医があっさりと告げた。

それとなく感じていても、それが言葉になると、鋭い矢になった。「言霊」とは言い得て妙だが、その時の私は、刹那、目の前が真っ白になった。一晩は眠ることが出来なかった。といって考えることも出来なかった。誰の話も、テレビの音も、新聞の文字も、茫洋と私を包む沈黙の空間に他ならなかった。

それでも朝になると、「ま、しゃあないか」と思った。

倉庫会社で埃まみれになりつつ安月給で働いた父、家政婦をして生活を助けながら一人息子を育てた母。息子をなんとか大学にやり、孫が出来た。二人で一万ほどの国内旅行が楽しみで、静かに暮らしていた。その両親より先に死ぬと申し訳ないが、とりあえず跡継ぎはいるし、家族は生命保険で食べるのには困らないだろう。悩んだところで「しゃあない」のである。進退窮まったときに、思い切ってしまうその楽天さ、ある意味のふてぶてしさは、苦労をしながらも何があっても前向きに生き続けてきた両親から貰ったもののようであった。

大部屋の同室者は私よりはるかに歳上の高齢者ばかりだった。食道ガンや大腸ガン、肺がんも多かった。手術前の者、手術後の者、ガンの程度もバラバラだった。

大部屋は賑やかだった。歳を取ると正直になる人も多い。人生への執着が薄れて外見、外聞も気にしない。執着が薄れることはいいことだと思ったが、人としての矜持は失いたくないと思った。しかし気楽さは私の心を楽にした。

「わしなんか、三回目やで」
少し掠れてはいたが太い声で矢部さんは言った。大部屋入口際にいた私の対面のベッドにいる人だった。七十七歳になると言った。その時の私から見ると父親と同じくらいの人だった。
食道ガンで、三回目の手術らしい。今回は癒着が酷くて、胃瘻から流動食を摂っている。直接胃の中に液体を入れるので、口で味わえない。そこで時折口の中にせんべいなどを入れて噛み、感触と味や香りを楽しんでいる。そして飲み込まずに吐き出すのである。人にとって食べ物を摂るとは単に栄養補給だけのことではないのだ。
「胃やろ、取ったら終わりや、大丈夫！」
矢部さんは確信を持って言う。入院手術も三回目になると、いろいろな人を見てきているから経験と直感的なものだ。患者なので、気楽に励ます。責任は問われない。医師ならばこういう具合にはいかないだろう。

翌朝私は、朝の散歩の途中に病院の屋上に出た。
都会の太陽が、薄汚れた大気を押しのけて光芒を投げかけたところである。
「お日様、今日まで生かせていただいてありがとうございました。もしできればもう少し生きたいのですが」
すっと声が出た。手を合わせた。気負いもてらいもなかった。
矢部さんはどうしているだろうか。もう二十七年経つ。
「生きていたら、百四歳になるか・・・」
「亡くなっているわ、もう」
妻が言った。手に持った富士リンゴが、つやつやと光っていた。リンゴが目の前一杯に広がって妻が消えた。
私は大きな駐車場に立っていた。
退職までには見たことのなかった「トモマル」というドラッグストアーが出来ていた。本来は薬屋だが、アルコールも、食料品もあるようだった。大きな

店で安いので有名である。関西一円に展開していたようだ。妻が時折この店から買い物をして帰った。

この市道周辺は工場街で、住宅は少ない。あっても丁度私の自宅のような、建坪が十坪前後のような二階建てが建ち並んでいる。昔の文化住宅は取り壊されて、駐車場かモダンな賃貸のアパートに変わっている。駅から歩いて十数分なので、便利とは言えないが、市道が狭いにも拘わらず信号が少ないので走りやすく、市の東西に出やすいからであろう。数十台以上は駐められる駐車場から私の足がスーパーに向いた。ここは毎日何かしら特売をしている。以前から帰宅途中にスーパーなどを見つけると立ち寄ることが多かった。

市道から駐車場に足を踏み入れると、隣に人の気配がした。

「何か買うと、ぶらぶら歩けなくなるぞ」

横を見ると、私がいた。

「おまえは・・・」

言葉が途中で止まった。そいつは確かに私であった。ただ、歳は若かった。たぶん四十前後の私であった。髪もまだ黒いし、目尻の老人斑もなかった。小鼻からの法令線も微かだ。

「驚くことはない。私はおまえだ」

そいつは言った。やや高くて艶のある声だった。

「わかっている」

よくわかっていた。亡くなったはずの妻が現れていたし、なにやら時間と空間に歪みが出来ている気がした。そんなに大層なものではなくて、私の感覚が幻影を見、私の脳が二人の私の会話をしているだけかもしれなかった。

「そうか、ぶらぶら歩けないか」

私は素直だった。

もう一人の私は、自分の言葉に私が従ったのが嬉しいのか、にやりと笑った。そいつは確かに私であったが、私ではなかった。三十年も前に、私がどのよう

に考え、どのように行動し、どのような体の調子であったのか、そんなことは切れ切れのエピソードの記憶の中に残っているだけである。連続して変化しない私という実在はないのだと思う。

三十年前も、ガンの時も、退職の決断をしたときも、そこには一瞬の私がいて、瞬間に消えているのかも知れなかった。それは現象として連続していても、実体としては存在するものではなかった。

「確かに買ったものは歩くに邪魔だし、ものによっては早く持ち帰りたいかもしれないな」

「そうだろ。それに、だいたい安い品物は悪い」

「そんなことはないが・・・」

「いや、安物買いの銭失いだ」

「そうかもな」

私は逆らわなかった。昔はそう思っていた。今は違う。安いものはあまりい

いものはないが、そうかといって悪いものばかりでもない。何につけ執着はよくない。よく考えることだ。ま、それでも間違うが。そういったことを彼に抗弁したところで、当時の私には分からないだろう。

「いや、ゆっくり話せば理解するかもしれないな・・・」と考えたが、彼は幻影に過ぎない。元に戻れることはない。もはや遅い。

私は踵を返して市道に戻った。

彼は消えていた。

自分と過去のもう一人の自分が出会っていた。

駅を降りてから妻に出会ったし、若い自分にも戻っていた。が、七十五歳の私は、そのままの自分を意識していた。現在の老人が、映画を見るように過去の妻と会い、過去の自分と出会って、そのことを認識しつつ楽しんでいた。

「認知症とはこんなものかも知れない」とも考える。

だが、妻や親や過去の亡霊が現れても、自分が子どもに戻ってもいい。しか

し、もう一人の自分と、それも過去の独立した自分と出会うことなどあるのだろうか。内面の記憶の声かも知れない。現在の自分のもう一人の人格だとそれは同時に存在しないはずのジキルとハイドのようなものだ。そうではなくて、タイムマシンのように私は確かに若い時代の私に会ったのだ。

狭い歩道ぎりぎりに建つ民家の塀際を、太ったネコが歩いて行く。

最近は痩せたネコを見たことがないな。いい世の中だ。

そんなことを考えながら、私もゆるゆると進んだ。幻影などが起こるのは、私も先がないのかも知れない。妻が現れてお迎えに来ているのかも知れないと考える。

立ち止まって、お日様を見上げる。病院の屋上で見た朝のお日様は輝かしい光をさしかけておられたが、ここでは、明るさの中、鈍く輝く空に溶け込んでおられる。

「お日様、今日まで生かせていただいてありがとうございました。もしできれ

ばもう少し生きたいのですが」
と思った。当時と比べて切実さはなかったが、なんとなくそう思った。
「認知症になるなら、すっと行きたいですが、チト欲張りすぎでしょうか。それに脳梗塞も嫌だな・・・」
まあ、勝手なお願いである。厚かましくもある。胃ガンは完治し、私は切除後二十七年生きている。父と母を見送り、子どもたちは巣立ち、妻も旅だった。
「少し早すぎたがな。まあ、しゃあないか」
私はお日様に微笑んで長い息を吐いた。
もう二キロ以上は歩いて、パチンコ屋が見えてきた。なんでも建つときには、反対運動が起こったそうである。
工場は少なくなって、コンクリートの市営住宅と県住が並んでいる。私の若い頃は、平屋の市住ばかりが軒を連ねていた。それが払い下げられて、ビルの間に今は狭いものの小綺麗な一戸建てが並んでいる。なるほどパチンコ屋の反

対運動が起こるはずだ。
「地元自治会長が裏金を貰って許可したとか、真偽のわからぬ噂が飛び交ったものだ。そういえば、ここの地域全体の東さんは四十年ほども会長だったな」
昔、孫請け会社の機械の騒音問題で地域で会議が開かれた。直接の関係はなかったのだが、何処でも使用されている機械で、問題はないという話をしてくれと頼まれた大和金属が、私を行かせたのだ。騒音問題はエアコンをつけて、防音仕様にすることで解決した。
その時の単位自治会をまとめる地域自治会の長が、東さんだった。「代わりがいない」ということで、当時でも十数年、それから私が退職後まで自治会長だったらしい。なり手がないというのも困った風潮だが、私自身もそういった役職を避けてきた。自治会役員さえしたことがない。他人のことを言えた義理ではない。とはいえ、それにしがみつく人もいる。こういう公的な組織の会長という資格があると自営などの場合、金融機関の融資が受けやすい。役所にも

口が聞きやすいという実利がある。高齢になると表彰もされる。
「自治会長で賄賂を貰ったか」と、そんなこともあったなと考えていたらパチンコ屋の前に来た。
何かに引かれるように、不意に入りたくなった。もう三十年ほども前にパチンコは止めた。以来、覗いたこともない。誰かに呼びかけられたように私はドアをくぐった。
騒音と、悪臭と、虚無と、人々の熱気と、魑魅魍魎の数々が、渾然一体となって襲いかかってきた。しかし、不思議に心は動揺も何も感じなかった。暑苦しさや、むっとした息苦しい空気や人々の雰囲気は感じるが、それは肉体をすり抜ける気がした。
平日の日中である。座席は三分の二くらい空いていた。
私が入って来ても背後を通り抜けても誰も振り返りもせず、気にもとめない。人が集まり欲望の空気は満ちているが、一人ひとりは孤立し、孤独な空間がパ

チンコ屋である。機械はいろいろと楽しくなっていたが、醸し出す空気は三十年前と変わりはなかった。

私は空いている台の前に腰掛けた。

パチンコ台を眺めたとき、誰かの視線を感じた。粘りつくような視線だった。

振り向こうとしたとき、私は誰かの目で私を見ていることに気がついた。

私はパチンコ台の前に座り、漫然と盤面を見ている。そして意識はどこかの席の誰かの頭の中にあるらしい。

「自分を見ているのか」

そう気がつくと同時に、焼けるような思考が、私の思いの中に割り込んできた。

「これはなんだ」

息が止まりそうであった。ランプブラックという色がある。油を不完全燃焼させて作る油煙のような色。その色のような思いの海が、ブスブスと燃えてい

た。
「・・・じゃないか。胃ガンでも死ななかったし、退職してもまだ生きていたのか。胃ガンになんぞなりやがって、二ヶ月半休みやがった。迷惑な奴だ。死ねばもっと使い良い頭のいい美人の若い女でも雇えたのに。しかし随分くたびれたな。ご大層な病気を二度もしたし、よく出歩いているな。まあもともとくたびれてはいたがな。先は長くねえな」
「あ」と私は思考の波の中で叫びそうになった。
安達であった。
何度も殴りかかる夢を見た課長であった。巨大ながっしりした体躯、それに似合わぬ、女の腐ったような行動。品性の下劣さ、そして嫉妬深さなどは、その堂々とした体育会系の物腰や体に隠された臆病さ、女々しさかも知れなかった。
私の心は私の体を座った席に残したまま、安達の脳波の中に紛れ込んでいる

ようであった。彼の思考が、巨大なうねりとなって、私の心に侵入しているようだ。しかも彼は私が頭の中にいることを知らない。

安達が平日の昼下がりに、こんな処にいるとは思いもしなかった。もう退職はしたであろう。私より少し下だった気がする。退職して再雇用で勤めたにしても、七十近いはずである。そこまで大和金属が面倒を見るとは思えない。それに、彼の自宅はもっと西だったと思う。車があれば簡単に来ることが出来たにしても、このパチンコ屋は場違いだ。

「う」と私はうめいた。彼の切れ切れの思考が見えた。

ランプブラックの心の海から、錐のような漆黒の闇の塊が盛り上がり、どす黒い光をまき散らしながら咆哮していた。

「そうか・・・」

改めて私は息をのんだ。確かな事実は知らなかったが、彼の生き様そのものが、生々しい現実が、私の心を駆け巡った。

安達は二人兄弟の長男だった。父親は田舎の中学を出て縁故を頼り市役所の最下級の吏員をしていた。公務員は安月給の代名詞の時代だったが、それが見直され競争が激化するようになりだしていた。十分に学力のない父親の縁故採用の噂は静かに広まっていた。父親は息子を優秀な高校に入れることが、自分のコンプレックスを吹き飛ばすために必要だった。息子たちを殴りつけて厳しく躾けた。母親も居酒屋の下働きをしていた。よく働きキリリとした美人だった。夫婦二人はうまくいっていたが、如何せん父親の焦りは安達たち兄弟を抑圧した。学問は本人の積極的な意欲を引き出せないと伸びない。それはゆるゆると育てることだ。東大の学生たちの家庭の所得が平均一千万を超えているのは、ゆとりを持って子どもの学力を伸ばせるからだ。勿論両親の学歴も高く生育歴も豊かである。しかし安達の両親、特に父親にその経験も余裕もなかった。安達は常に下位の成績グループにいた。ただ中学時代からバレー部にいてうまかった。高校もバレー部枠だったし、大学も私立の体育学部にバレー推薦で入

った。国体にまで出たが、実業団に入るほどの力でもなく、小さな会社を点々としたあげく、バレー部の縁で大和金属に最終的に拾って貰った。

土地の旧家の娘と結婚した。娘は小学校の教員でしっかり者だった。若い間はよかったが、娘の教養もまた彼のプライドを傷つけだした。同じ最終学歴だったが話のレベルが合わない、三流週刊誌とポルノとやくざ映画を見る男と、クラシックを聴いて、絵を描き、ボーボワールと智恵子抄にはまる女性がいる。若い頃は性というものが一時期の接着剤になり、異質の趣味やレベルの差も興味の対象になる。しかしそれが日常の風景になると、二人の間に暗黒の断崖が現れる。そして二人はより根本的な品性の違いに気づく。性格ならばまだ許せても、道徳的価値が異なる夫婦ほど悲惨なものはない。彼は父親から受けた暴力を引き継いでいた。中学、高校、大学時代のバレー部の暴力がそれに拍車を掛けた。自分が唯一誇れるものが、指導者からの体罰で得られたものであり、指導者は神様だった。父もまた、彼が国体に出たことを褒め、指導者を絶賛し

た。暴力は成功をもたらす正義であり、人を自分と同じように成功させる武器だと考えていた。県大会で優勝し、国体に出たのである。

しかし、既に若い頃から安達は自分にないものへの強烈な願望と、その反面としての嫌悪感を持っていた。他人の立場に立つからこそ優しさは生まれる。しかしそうなれなかった。人の身になることは、力をふるえなくなることであり、尊大に出来なくなることで、強い自分が崩壊していく恐怖を覚えた。今更、音楽や詩に興味は持てなかった。試しにクラシックを聴いてみたが、出だしだけで退屈した。面白そうで買い入れた「黒い画集」の小説の文字を追い始めると頭がくらくらした。知識や教養のあるものが肉体を鍛えることは三島由紀夫のように、青年期を過ぎても比較的可能だった。スポーツを楽しみ始めることも出来た。しかし、知性を獲得できないままの者が三十代を過ぎて頭脳や感性を鍛えることは、恐ろしく難しかった。その基礎を作るのは、未熟な頭脳に対する親の人間性豊かな抱擁、人生や世界に持ち続ける謙虚さ青臭さと、学校と

いうモラトリアムの期間でこそ可能だった。

制御できない暴力は家庭にも持ち込まれた。女の知識や教養が自分より高いことに我慢ならなかった。知識や教養は彼のあこがれであり、得られなかったことが、持つものへの劣等感に転化した。やがて妻を殴り、生まれた子どもを殴りつけた。殴ることが愛情であり教育だと錯覚したかった。知識や教養で子どもや妻の尊敬を得ることの出来ない裏返しである。言うとおりにならないイライラを力で押しつけようとして却って心をねじ曲げた。たった一人の息子は、中学を出ると家を飛び出した。東京で、独身のままレストランの下働きをしている。息子とは家出以来会ったことはない。妻とは離婚はしなかった。同じ屋根の下で他人のように暮らしていた。

鬱屈した劣等感、それを隠すための見栄。自分の家族でさえ自分から離れる不安。それは味方を信じられない心をつくる。いつ離れていくか、本心からの家族も友人もいない寂しさ、その裏返しが、職場での忠実なように見える子分

擬きづくりである。部下も敵と味方に分け対立させて従わせようとした。だが本当の味方などどこにもいなかった。

彼の人生とその心が、私を溺れさせるばかりの波となって流れ込み、息苦しくなった。

そのうちに、安達の思考の波が緩やかになった。

「こんなところにいるわけはないか。あいつが・・・」

と彼の言葉が私の頭の中に響いた。彼の思考は他に流れた。

「社長も脳梗塞とはな・・・」

もう一度安達の視線が私の体に投げられたが、どうやら私を見ていないようだった。安達は私の姿を捉えたようでいて、別人だと思ったようであった。

私はホッとしながらもまだ安達の頭の中にいた。そこから逃れられたが、見てみたい誘惑には勝てなかった。他人の心を覗き込むなどと言う体験は、そうできるものではない。

安達は大和金属に退職後も嘱託で勤めていた。会社にしても社長のバレー部の先輩をむげには出来なかった。しかし、総務課は困ったらしい。それが彼の思考から読み取れた。

嘱託初日、「安達さん」と若い課員から呼ばれて怒っていた。ジロリと若者を睨んで「おまえ、俺をしらんのか」と、イスの背もたれに弓なりに座って低い声で呟いた。

それまでは課長であった。会社も困惑したらしい。課長補佐とか心得とかをつけるわけにはゆかない。勿論係長ではない。定年延長制度の出来る前、無理して雇った嘱託である。事務能力はない。二百人足らずの会社とは言え、嘱託が社長と対等に物言いをしようとする。オーナー社長の先輩という立場で大きな顔をしていた人間を、どう扱えばいいのか。結局、課の隅に衝立でコーナーを作り、主任研究員という名前をつけた。「総務課主任研究員」である。仕事は情報管理や書類整理だが、実質的には何もなかった。出勤すれば新聞を読み、

金属加工業界の記事を切り抜き、書籍を読んだ。何を読んでいても注意はされなかった。パソコンも与えられたが、もともとろくに扱えない。ネットでウィンドサーフィンをしていた。退勤時刻になれば、のそりと立ち上がった。

「ご苦労さま」等と誰も言えなかった。「お疲れ様でした」と言わなければ、ごつい体から、粘るような視線が投げかけられた。

いわゆる窓際だが、安達はあまり痛痒は感じなかった。何かあると「俺は社長の先輩で、あの社長だけを尊敬している」と言った。付け届けは欠かさないようであったし、社長もたまにすれ違うと「先輩、どうですか」等と言ったから、社員は慇懃に扱わざるを得なかった。慇懃無礼に対応したら、不機嫌な顔と、懇親会でのドスの利いた嫌みに出会うことになった。

それで五年勤めた。

安達にとってもそれは意地だった。母に似てキリリとしたしっかり者の妻にぶらぶらしている姿を見せるわけにはいかない。素直さや甘えを出した途端に

自分のこれまでの人生が壊れる気がしていた。無理な生き方にしがみつくしかなかったのである。

今日は、大和金属の記念パーティらしい。二百人足らずの会社なのに大和会という退職管理職の組織がある。管理職でなかった私などはお呼びではないが、それが主宰した今年度末退職者のお祝いらしい。安達は例年通り意気揚々と出かけたが、後輩の社長が引退しその後脳梗塞で認知症になり会長職からも退いていては、手のひらを返したように扱われた。慇懃無礼にである。それで早々に引き上げたが、帰宅して妻の笑うような冷たい視線に出会う勇気はなかった。例年ならば昼食会の後、社内見学と現場社員との懇談会があり、二次会が持たれる。その後、夜の酒席へと雪崩れ込む。まさか陽も傾かないうちに帰宅は出来ない。せめて暗闇が訪れるまでは時間潰しをしたかった。

私は頭を振った。

フッと視界が回転した。頭からランプブラックの塊が粘りつくように抜け出

て消えた。
私は大きなため息を吐いて席を立った。最早、彼からの視線は感じなかった。誰も彼も、まるで自分しかこの世界にいないように、ガラスの盤面を見ている。パチンコは思考と欲と、そして虚脱の世界である。自分の存在と無関係に刻だけが流れていく。
私は店を出ると、そのまま歩道を東に歩み始めた。
安達に対する心の隅にこびりついていたダークグレイの思念が、私の口や鼻から、細かい微粒子となって明るい大気の中に拡散していく。
私の人生にらせん状に絡みついていた安達への思念が、並行する波になり、次第に影を薄くしていった。それにこだわりつつ生きるのはもう十分であった。
「三分の二は来たか」
小道は緩やかにカーブしつつ、北へ向かっている。もう一キロも歩めば、鉄道高架の下を潜って国道に出る。その先が市の中心部で、更に北の低い丘陵地

の上が自宅である。
「少し暑いな」
大気の温度が上がったのか、自分の体温が上がったのか、恐らく両方だろう。首回りに熱気を感じる。
鉄道高架の下は暗い。
西藤江から市の中心部にある藤江駅に近づくと、鉄道車線が六つになる。しかも引き込み線があり、高架下の距離は長い。
歩道は幅が広くなり、手すりがついて高い位置になり、車道はグンと下に沈み込む。
広くなった歩道だが、斜めに所狭しと自転車が停めてある。人がすれ違うには半身を捻らねばならない。
「矢部さんか・・・」
闇に入る前に私は気づいていた。

歩道が高架の真ん中になる最も暗い辺り、裸電球が点いてはいるが、光が闇に飲み込まれている。

「よう」

と矢部さんが片手をあげた。七十七歳のときの彼だった。それは理の当然で、私の退院以来、彼とは出会ったことがない。だからこれは私の頭の中の映像に違いなかった。それに生きていたら妻の言ったとおり百四歳になる。こんな場所で一人でいるはずはなかった。

矢部さんのことは、入院までも退院以後も知らない。相前後して入、退院した人生の中で僅か二週間程を、同室で寝起きしたに過ぎない。ただそれは生死の境での時間であった。人生の逢魔が刻をともに生きたのである。私は幸い魔の手から逃れたが、彼が無事退院したのかどうかさえ実は知らなかった。私より先に手術を終えた覚えはあるが、六人の大部屋の中で退院の後先も記憶にはない。

「矢部さん・・・」

私は言葉尻を濁した。この人影は私の頭脳が作り出したものだろうという考えが強くなっていた。或いは人の思いというものが肉体とは別に存在して、それを感じるのかも知れなかった。霊魂とか魂とか、幽体などとも呼びたい気もしたが、それもぴったりとはしなかった。

人の意識は脳が作り出す細胞間の微弱な電流によるものだという。脳細胞はこれこれこういうもので、いくつあるという。この部位は言語野だという。しかし細かく分類していっても、限度がない。細胞、分子から原子、素粒子。発見の度に究極の物質と言われつつ何処までも分割し続ける。そして空間の中で相互に干渉する。独立しているように見えて広大な空間と無限の時間軸の中で関係性を持つ。この関係性は、脳細胞も同じである。二つ集まると振る舞いが変わり、神経や血管とつながるとまた働きが変化する。その振る舞いは観察できても脳全体は闇の中である。体を構成する六十兆の細胞は、その中で活動す

る千兆の細菌と共生する。それは、銀河の三千億の恒星、大宇宙の三千億の銀河のつながりと同じように実は緊密に連携しているのだ。私は体内に宇宙を有し、宇宙は体内に私を含む。それは、意識ではなく肉体でもない、そして常在しつつ時に関係性の中で顕在化する存在である。固定した個ではないが、現象として現れる個であろうと私は思っていた。

「元気なようだな」

「はあ、おかげさまで、矢部さんはいかがですか」

「ああ、食道ガンは取った。ついでに命もな」

「あ」と私の言葉が凍りついて地面に落ちた。予期してはいたが、そうだったか。私は沈黙していた。

「まあ、しゃあないしな」

私はゴクリと喉を鳴らして繰り返した。

「しゃあない、ですか」

「ああ、死ぬときは死ぬ。それまで生きるこっちゃ」
「ですね」
矢部さんの意識が、私の意識と混在した。大正生まれ、農家の三男坊。第二次大戦で南方戦線で戦った。戦ったというと威勢がいいが、大多数の戦友が、弾丸もない、食糧もないジャワのジャングルで餓死した。その生き残りである。
そのフラッシュのような光景に「う」と思わず私はうめいた。矢部さんは何かを食べていた。土手に倒れ伏した・・・・・・何かを。
それはまさに聖餐と呼ぶにふさわしかった。人を責めるには易しいが、私がその立場でそうしない保証はなかった。カルネアデスの舟板ように自分の世界を守り、生きるために他の世界を否定することさえ現実であった。それを認めない姿は尊いが、全てがそうあれば世界は命を宿せない。否定できないこともまた命の業である。
一人ひとりの人生には凄まじい思いと経験がある。

「まあ、しゃあない」
微かに矢部さんの声がした。
ジジジッと裸電球が泣いた。
矢部さんの姿はなく、暗闇の自転車のそばで佇んでいる私を無視したように、ホームレスが通り過ぎていった。鋭い饐えた匂いがした。
私は高架下を進んだ。陽の光が、次第に闇を駆逐して、やがて全身を包んだ。私は闇を内在する陽の中に戻っていた。
国道に出た。
それを右折する。歩道は改修が終わって四メートルほども幅がある。片道二車線の道を、トラックが大気と光を巻き込んで走り抜けていく。
先ほどより暑い。ゆっくりと歩いたつもりだが、流石に四キロほどにもなると体温が上昇するらしい。首が絞められるように苦しくて厚手のシャツの第一ボタンを開けた。

藤江駅の北に出る。左手に石垣と立派な天守が見えた。天守閣は戦後に泉市長が建てたものだ。もともとこの藤江市は山陽道沿いの城下町である。低い丘陵に囲まれた盆地で、その北の台地に城郭はあったが天守閣はなかった。町のシンボルにと言うことで泉市長がコンクリート製の天守閣を拵えた。南には丘陵の向こうに瀬戸内海が広がっている。高い台地の上に建つ五階建てのビルに相当する天守の上からは僅かに望むことが出来る。

駅の北を通り抜けて、国道を横切り、元はお堀であったところを埋め立てたという公園に沿って北上する。道は急な坂になる。

「何度ものぼったわね」

妻が言う。

そう、大和金属から歩いて帰るときも、西藤江から藤江まで電車に乗ったときも、この坂は歩く。藤江駅前からバスに乗ると、四、五分ほどで自宅近くに着くが、あまり使ったことはない。バス代が高いこともある。しかし二、三十

分に一本程度のバス待ちをするより十五、六分歩くほうが気分的に楽だ。
「子どもは重たかった」
「ベビーカーは一台だったわね」
「ああ」
私は白い歯を見せた。
息子と娘は二つ違いである。下が生まれて、出歩けるようになると、なんとか上の方を歩かせようとしたが、その日の気分でよくぐずり、そうなると抱っこかおんぶだった。
十五、六キロになっていたか。子どもを抱くのは楽しい。体が密着し命の重みを感じる。子どもは安心しきって体をゆだねる。
「だけど重いわね」
妻が笑った。あまり妻の笑い声に注意を払ったことはなかったが、高くも低くもなくて、空気の中に溶け込むような響きだった。

「ねえ、早く行こうよ」
小学校高学年の息子が坂の先にいた。今は愛知で自動車メーカーに勤めている。自宅も購入してすっかり向こうの人になり、もう三年ほども電話の声しか聞いたことはない。
「お兄ちゃん、待ってよ」
と手前から追いかけているのは二歳下の娘だった。大きくなって、千葉の短大を卒業して短期間東京の会社に勤め、そこで知り合った男性の処に嫁いだ。娘は孫たちが夏休みになると連れて帰ってきて一週間ほどいる。舅姑と一緒なので息抜きらしい。
もう二人とも関西に戻ってくることはないはずだった。親のことが心配でないと言えば嘘になるだろうが、帰郷しても継ぐものは何もなかった。
「一人になったら、施設に入るからな。心配しなくていい」
そう言い続けていた。それが新しい時代の親子であろう。こだわることはな

い。戦前のように先祖からの農業をしていたなら別だが、受け継ぐ土地も係累もなかった。ある意味「しゃあない」のでもある。

小学生の二人はじゃれ合いながら、坂道の上に広がるホリゾンブルーの空に消えていった。

「元気で過ごしているかしらねえ」

妻が、かみしめるような口調で言った。

「ああ・・・、大丈夫だろう」

私はゆっくりと首を振りつつ答えた。

急な坂は五分ほどで登り切る。四キロ程を歩き暖まったはずの体である。汗をかくかと思っていたが、滲み出た感じもなかった。登り終わったところの四つ角を市バスは右折していくが、私達は細くなった道を直進する。そこからは緩やかな下り坂になり、東西に流れる三瀬川の手前を右に曲がると我が家だった。

妻の姿はいつの間にか私の頭からいなくなっていた。

この辺りは雑木林であったものを切り開いたところである。建て売りを買うと決めたとき、市内も隣接する町の宣伝も舐めるように見て、不動産屋も回りにまわった。

高台を越えた丘陵地の小さな三瀬川は雑草が茂っていた。夏は蚊が多いかと思っていたが、大規模なニュータウン開発で川も護岸で固められた。

敷地が二十坪ほどの建て売りがびっしりと建てられ出した。窓を開けると隣家の窓が見えた。狭い玄関の左手に十畳ほどのリビングダイニングがあり、奥に小さな和室に風呂とトイレ。二階は八畳の洋室と六畳の和室にベランダ。小さくても我が家であり、そこが私と妻の人生の基地であった。

現在は前後左右何処を見ても、低い塀に囲まれて、「ここは私の領地だ」とも言うような家が建ち並んでいた。

三瀬川の手前を曲がると小さな露地があり。それを囲むようにコの字型に家

が数軒建っていた。その右手二軒目が我が家である。
私は自宅の門の前に立った。
茶色の鉄製の小さな門扉は、私がペンキを塗った。門を開くとすぐに玄関ドアで、人の立つ場所もやっとと言うくらいしかない。しかし門がないと低い塀が途切れた空間はなんとも間が抜けて見える。
私はゆっくりと自宅を見上げた。小さな住処だ。外壁を取り替え、屋根も換え、内部も手を入れたが年月は隠せない。子どもたちがいなくなって妻と二人になると、次第に二階に上がることが少なくなった。六畳の和室は納戸同様で、八畳の洋室も週に一度くらいしか掃除はせず、物置の様になりつつある。
「まあ、私と妻が死ぬまでは持つだろう」と思っていた。最早売却しても古家付きの土地でしか見てくれない。おまけに藤江市の人口は減りつつあり、この辺りも例外ではない。土地値も下がりつつある。葬式費用は用意しているが、子どもたちに残す財産はない。

私は自分の手の甲を見た。血管が浮き出てシミが濃い。
夫婦どちらかが欠けたら、この古家を処分してケアハウスか、老健施設にでも入る話をしていたのを思い出した。
改めて自宅を眺めてから、鉄扉に、手を触れた。自宅を出て、藤江駅に向かい、西藤江で降りて、四、五キロの道を歩いて戻ってきた。たった二時間弱の刻の流れの中で、もう一度生涯の繰り返しをしたようだった。
鍵を開けて軋るドアをひらき、たたみ半畳ほどの玄関に入る。
閉じ込められた空気が外に出ようとして、外気とぶつかり小さな渦を巻いた。
「ただいま」と、掠れた声を出した。
妻は大抵リビングダイニングか、奥の寝室にしている六畳にいる。
どちらからも期待した「おかえりなさい」と言う声はない。
私は現実に戻っているのを感じた。この住処には私しかいないのである。
すっかりくたびれたバーガンディ色のバックスキンの靴を脱ぐと、上にあが

った。
久しぶりにテクテクと歩いた気がして足の裏が疲れている気がした。
妻は買い物にでも出かけたのかも知れないとまた考えて、小さく笑ってしまった。彼女はいないのだ。
リビングには入らず、廊下を直進して、和室の板戸を引き開けた。
そう思った。
だが、そのまま私の体はまるで煙のように板戸を通り抜けた。
頭の中が透明になって一度に情報が押し寄せてきた。
窓にコチニールレッドのカーテンが引かれた和室に、布団が敷かれていた。ナイルブルーの掛け布団が半分めくられ、シーグリーンの敷布の上に、焦げ茶のジャージを着た私がいた。
白い薄手のセーターを着た妻が、私の顔の上に屈み込んでいる。
私はそっと近づいた。

上から私を覗き込んだ。笑っていた。しわとシミの浮き出た顔は私のものである。その唇がにこやかにうねり、閉じられた瞳も和やかに笑っていた。

足下にポータブルトイレがあり、枕元にお盆に載せられた水差しや薬、ティッシュの箱があった。

シーグリーンの敷布の上に、地模様のついたスノーホワイトのネクタイが不釣り合いに投げ出されている。

「そうだったのか」

私は仰向けに眠っていた。私は私の体に戻っていた。確かに閉じられていた瞼を通して妻の顔が見えた。妻の手が私の頬に触れ、額を撫でた。

何もかもがはっきりとした。私は、「ご大層な病気を二度も」と安達の言ったとおりの大病をした。一度目は胃ガンで、二度目は退職後の脳梗塞だった。三年ほど前のことだ。足が不自由になり、かろうじて室内を歩けるかどうかと言うほどになった。やがて、曜日がはっきりしなくなり、幻影を見るようにな

った。妻との会話は出来ていたが次第にそれもまだらになった。市内の脳神経外科から、県外の著名な病院まで回ったが、軽度の認知症であり、それは回復と進行を繰り返しながら次第に悪化していく。

それでも急に思考が明晰になるときもある。

「楽にしてくれないか」

最初は冗談めかして妻に言い、妻もギョッとしたが、その言葉に次第に魂が籠もるようになっていった。

体に痛みや苦痛があるわけではなかった。ただ自分が自分でなくなりつつあることが不安だった。肉体の死ではなく心の死を感じるのは怖かった。勿論、幻影の世界は体も自由なら心も時間の海に漂うだけである。だが他人の視線や言霊はその中に遠慮なく入り込んでくる。その時はキリリと頭の奥が痛んだ。

何をしても悪化するだけで、回復する見込みはない。山あり谷ありの人生だったが、考えてみれば誰も彼も大変な道を歩んでいるのだ。それはこだわらな

ければ、誰もが歩む道であり、平凡で平坦な道なのかも知れない。私もゆらゆらと、実際は楽しみつつ人生を歩んだと思う。苦は忘れ去ることが出来る。「しやあない」のだ。

「楽にしてくれないか」

朝の挨拶を妻としたときから考えていた。

私の頭脳は残りの力を出し切って考えていた。頼めるのは妻しかないことを、震える指でペンを握り便箋に書いた。

「楽にしてくれないか」

十時のお茶の後、私は妻に向き合って言った。その時の私の頭脳はきちんと事態を認識していた。

妻は私の瞳を凝視した。痛いほどの視線と、あふれるほどの妻の心が、ともに雪崩れ込んできて、私は溺れそうになった。

「いいの・・・」

「あ、すまない・・・」私の瞳に涙が滲んだ。「たのむ・・・」

妻が涙を拭いた。二階のタンスの奥から、数度しか使ったことのない礼装用のネクタイを持って来た。それは、私達の結婚式に使ったものであり、子どもたちの時にも役だったものであった。

私は再び、ひげを剃り、顔を洗い、体を拭いた。ジャージに着替えて、敷布の上に横になった。

じっと動かない自信はある。いや苦痛ではない自信がある。

妻は枕元に座り、ゆっくりとネクタイを私の首に巻いた。それから私を覗き込み、涙の一杯たまった瞳を見せた。

私は微笑んで、ゆっくりと頷き目を閉じた。

妻の頭が私の横に来る感じがして、片方の手が胸の上を伸びた。首がゆっくりと圧迫されていく。苦しさがある気がしたが、それは首回りを空気で絞められるようであり、暖かさがあった。

胸を強く押されるような感じがして意識が薄くなり、プツリと切れた。
私は私を見ていた。
そうだった。私は妻に送って貰ったのだった。亡くなったのは妻ではなくて私だった。
「誰も私を見なかったはずだ」
歩道でも、みんな疲れた顔で私など素知らぬ顔で通り過ぎた。そしてパチンコ屋の安達も私の姿は見なかったのである。ただ私の存在を感じただけに過ぎない。
そしてほんの数分間の間に、私は人生のエスプラネードを再び歩いてきたのだ。平坦な道、遊歩道。激動と言えばそう表現できるかも知れない道。だが、人生とはそう言うものなのだ。私は妻と楽しみつつ人生を歩いてきたのだ。こだわるまい、その道は「ま、しやあないか」である。十分に生かせてもらった。十二分に生きた。

額を撫でていた妻の手が止まり、彼女の唇が私の唇にそっと触れるのを私は感じていた。

了

大西亥一郎（おおにし・いいちろう）
1947年　神戸市生まれ、神戸育ち。
1981･1982年　小学館「わが子に贈る創作童話」優秀賞受賞
1984年　日本童話会新人奨励賞受賞
1999年　半どん文化賞（及川記念賞）受賞
・ポプラ社「心があったかくなる話　４年生」
・リブリオ出版「兵庫の童話」
・神戸新聞出版センター「海とめんどりとがいこつめがね」
・偕成社「学級ノートのミステリー」
・兵庫県学校厚生会「ひょうごの童話」　　他
小説･童話　明石市文芸祭市長賞
随筆･童話　神戸新聞文芸入選　　他
2008年～　「アクトス」代表。編集人。
2010年～　東はりま文化　子午線編集企画顧問
2011年～　栴檀編集委員

エスプラネード
二〇一三年三月一日発行

著　者　大西亥一郎
発行者　大西亥一郎
発行所　大和評論社
〒六七三―〇〇三一
兵庫県明石市宮の上一-十七-六一四
電話〇七八（九二二）四五六二
非売品（頒価八〇〇円）
©2013 Iichiro Onishi